

---

# スノーマン

望月 霞

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

スノーマン

### 【Nコード】

N3891J

### 【作者名】

望月 霞

### 【あらすじ】

冬のある日、人形たちが歌ったり飛んだりしていた！？

そんなはずはない、と思う大人たち。しかし事実だったことに大騒ぎになる。

これはたしかに存在する、雪の妖精たちの物語。

ここはとある世界のところ。　ここが世界のどの辺りにあるのか、この地の名前すら、誰も知らない。　だが、外地に住んでいる人間がたまたま偶然に見かけたのは、いつのころかのクリスマスであった。

「パパーッ！！　あっちにね、かわいいお人形さんがいたのーっ  
っ！！！」

「お人形？　こっちの店じゃなくてかい？」

「ちがうのーっ！！　お人形さんがね、なかよくおうたをうたってたんだよっっ！！！」

……人形が歌を歌っている？　どうということなのだろうか。――  
応、子供に話を聞いてみるが、どうも言っていることがおかしい。

何故ならば、着ぐるみや操り人形ではなく　“本物の人形”  
が動いているらしいのだ……。　と言っても、どうせ子供の言うことである。　信じる大人など、誰ひとりとしていなかった。　ここで誰かが好奇心に任せて様子を見てきていれば、彼らの気まぐれな外出に付き合えたかもしれないのだ。　。

「ふんふふんふんふんっ」

「くるくるくるくるんっ」

「ぴーちちぴちぴっぴっ」

と、木の人形とわらの人形、そしてぬいぐるみなど、様々な人形が集まり輪を作って歌を歌っている。　人形によって話す言葉が違  
うので、音程はあっても、はたから聞いたらただの雑音にしか  
聞こえなかった。　だがもちろん、これらはただの“人形”で  
ある。　誰かが操って遊んでいるのだ。　と言っても、人形に糸が

かかっているわけでも、背中にゼンマイがあるわけでもなかった。  
では、いったいどのようなようにして人形が動いているのだろうか？

……答えはこうである。

「おもしろいっち！ ニンゲンってこんな物を作っているんちね  
ー！ー！」

「かわいいうち！ どうやったら作れるんちね？」

「ニンゲンは火を使うから、オレっちたちには作れないっち……」

「これは火を使わないっちよ？ ボクらでも作れるっちー！」

と、語尾にヘンななまりがある、独特の話しかたをする何か。

見てみると 何と雪ダルマである！ 雪ダルマが話している  
のだー！

「でも、オレっちたち。 外界に遊びに来たことがバレたら氷付  
けにされるっちー！」

「いやいや、そんなもんじゃすまないっちよ！ きつと頭を持っ  
てかれちまうっちさ……」

「大丈夫っち！ 外界には誰も来ないっちっ！ ！ だからバレな  
いっちよっ！ー！ー！」

「そうそうっち！ 思う存分遊ぶっちー！」

と、4体の雪ダルマがそれぞれ言う。 よく見ると、顔は同じで  
あるが、それぞれ違う特徴があった。 それは、普通の雪ダルマに  
はおそらくついていないだろう、人でいう背中と思われるところに  
ある “羽” である。 「ピクルの羽はいいっちね！ ボクもそ  
の色がいいっちー！」

と、ひと際元氣そうな、緑色の羽を持った雪ダルマが言う。

「そあーっちか？ ピクルはケイシャの羽の色がいいっちー」

と、ピクルと名乗る、赤い羽根を持った雪ダルマは、自分に向か  
って言った雪ダルマ ケイシャに言った。

「ねえねえ！ この人形にも羽をつけてみるっちよー！」

と、遊び心でいっぱいの雪ダルマ ヨークが言う。 この  
雪ダルマの羽の色は、澄み切った空のような水色である。

「羽？ どうやってつち？？」

と、薄紫色をした羽をした雪ダルマが言う。この雪ダルマは、どうやら好奇心旺盛のようで、ヨークが行っている作業を、じーつ、と眺めている。

「大したことないつち。ただ、これで羽をつけてあげるだけつちよ、キララ」

という返事を、キララにした。そのように言われたキララは、頭を少し右回りに動かして、よくわからない、といった行動をとった。

「ピクルー！ ケイシャー！ その人形も持ってきてつちーつ！」

「わかったつちーつ！」

と、ヨークは羽をパタパタさせながら、2体の友達に頼んだ。

その間、ヨークは何やら準備をし、キララはその辺で、ボヨーンボヨーン、と跳ねて遊んでいる。その数10秒後、ヨークは180度に顔を回し、

「準備できたつちよーつ！」

と、ジャンプしながら楽しそうに皆を呼んだ。呼ばれた3体は、ヨークの元へと集まり、何やら相談をしている。……はてさて、これから何が始まるのだろうか？

「……ということなんだつち！」

「へええー！ これでボクたちが生まれたんでつち？」

「そうそうつち！ だから、これをつければこの人形たちもオレっちたちの仲間入りつちー！」

「いいつちねーっ！ ぼくつちも賛成でつちー！」

「ボクもつちー！」

「ピクルもつちー！」

と、キララ、ケイシャ、ピクルの順で元気な返答を返す。

新しい遊びをするために、4体は準備に取りかかった。それは、ここに持ってきた人形たちを彼らの仲間に加えて独自の遊びをする、

というものらしい。まずは、彼らの象徴である“羽”を人形たちにつけてあげた。つけかたは至って簡単で、まだ命を吹き込まれていないそれを背につける、というものだ。

「さてっと！つけ終わったつちかー!?」

「こっちは終わったつちよー!!」

「こっちもつちー!!」

「OKつち！じゃあ、始めるからこっちにきてつちー!!」

と、ヨークは皆に向かって叫んだ。それを聞いたピクルたちは、急いでヨークのところへと急ぐ。全員がそろったのを見たヨークは、何かをつぶやく。すると、ヨークが何かを言い始めてから、辺りが白い光がほのかに色づいていった。だんだん、雪のような光が多くなっていき、しまいには周りが見えないぐらいの量になる。だが、次の瞬間、光の結晶は、ぱあっ、と飛び散ってしまった。

「あゝあ、キレイだったつちのに……」

「ぬひひ、真ん中を見てみるつちー!!」

「あーっ!!」

「ど、どうなってるつちーっ!?!」

と、ケイシャとキララがほぼ同時に叫ぶ。空を見ていたキララが、何かと思つて見てみると、

「に、人形が空を飛んでいるつちーっ!!!!」

「さあさあ、オレっちたちもいくつちよー!!」

と、ヨークが最初に空へと旅立つ。目的は当然、空に浮いている人形たちだ。呆然と見ている3体に向かって、ヨークは、

「何してるつちー!!早く空で遊ぶつちーっ!!」

と、短い腕をぶんぶん振りながら、3体に呼びかけている。はつと我に返ったピクルたちは、あわててヨークの後を追った。

空に広がる色とりどりの羽は、中心から外れたところから見れば幻想的で、不可思議な空模様だった。ただ、その中に繰り広げられていることはいたって普通のことであった。

「わーいっ！！ 楽しいっちーっ！！」

「これはいいっち！ …… うわーっ、人形たちの羽がキレイだったねー！！」

「ねえねえっち！ ここから 『マチ』 って近いっちか？」

「近いっちよ。 どうしたっち？ キララ」

「この人形たちは返さないといけないっち……。 だから、ごめんなさいって意味で、このまま行かないっちか？ きつと、ニンゲンたちも喜んでくれるっちよ！」

「それはいい考えっち！ じゃあ、ちよっくら行ってみるっちー！！」

おおーっ！ と、キララの提案に、全員が賛成した。

…… 本来ならば、人間に姿を見られてはいけないのだが、彼らの場合生まれて間もないところから、そのあたりのことが理解できていない。 この後が大変である。 まあ、それが幸と出るのか不幸と出るのか、何ともいいようがないのだが。

だが、彼らの空の旅は人間たちがたくさん住んでいる町の上で終わった。 というのも、大人たちがかけつけてきて、彼らを強制送還したのだ。

「何考えてるっちか！ ニンゲンに姿を見られなかっただけでもよかったっちが……」

「あれほど外に出てはいけないうって言ったでちっ！！ もしかしたら、溶けてなくなっていたかもしれないでちっっ！！！」

「大体、他雪ダルマ様ならず他人様のモノを勝手に持ち出すなんて、そんな風に固めた覚えはないっちよっ！！！」

「こんな魔法まで持ち出して！ 人形を飛ばす以外に使ってないでっちなっ！？ 使ってないでっちなっ！！？？」

あうう……、とキララ、ケイシャ、ピクル、ヨークの4体は、親たちから野次の台風を受けていた。 いや、雷暴風、言ったほうがいいかもしれない……。

「まあまあ、待てっち」

と、しおれた声が部屋に聞こえる。 ふとそちらのほうを見てみると、ひととき大きな帽子をかぶった、大きな雪ダルマがいた。 大きい雪ダルマは、帽子をつかみながら、

「やってしまったものはしょうがないっち。 その辺でやめたらどうっち」

「そうそうっち！ かわいい子供のイタズラっちっ！！」

「そうそうっち！！」

と、4体。 しかし、それ以上は親雪ダルマたちの視線で阻まれた。 すると、大きい雪ダルマは、

「そうかそうか。 では、こちらも “カワイ〜おちおき” をするとしようかのっち」

「っ！！！！」

……そのあと、彼らの悲痛な叫び声が響き渡ったことは言うまでもない……。

この後、人間たちの町は人形が返った家では大騒ぎになっていた。 人形が歌ったり空を飛んだり等、誰の仕業かつきとめようと、テレビ局まで出てきた始末だ。 しかし、結局のところはわからず、そのうち人々の間から薄れていった。

それ故なのか、後にこう言い伝えられるようになる。



精  
・  
クリスマスの時季、人形が勝手に動き出すのは  
スノーマン”の仕業である  
と。  
“雪の妖

（後書き）

当作品を読んでくださり、誠にありがとうございます^^  
前作からかなり時間が空いたあげくに、新作じゃないですけど

今回も楽しんでいただけたら幸いです。

またあなたにお会いできる日を、心待ちにしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3891j/>

---

スノーマン

2010年10月28日04時48分発行